はじめに

本書は、私のブログ「小閑雑感」に 2005 年 11 月から 2006 年２月までに書いた 83 篇を納めたもので、同名の単行本シリーズ６冊目である。ブログという、オンライン日記的な表現形式が生まれたおかげで、私の執筆態度に変化が起こったことは前作の「はじめに」に書いた通りである。その時、この小文集の性質についても書いたが、本書発行に際してもそのことに変わりがないので、前作を読まれていない人のために以下に転載する：

> （この小文集は）完成された「作品」集などではなく、あくまでも「とっかかり」集である。だから読者は、その中に何か決定的なことを探すのではなく、私の日常的な「思い」や「興味」の吐露の場として、また、「発想の揺籃」としてそのまま受け取り、私という人間を理解してくだされば幸いである。

ブログの文章は、こういう即興性や自発性がある一方で、どうしても事象を深く考察するものにはなりにくい。その点を補おうとして、同一テーマについて連続的に書く“続き物”を登場させた。今回の 83 篇の中には“続き物”が５つある。これらは、ブログの１回分の長さでは言い切れなかったこと、また“現在進行形”の出来事のフォローアップなどの必要から生まれている。これを言い換えれば、“続き物”は私が２日以上の時間軸で注目し、文章にしたテーマだから、私の関心度が高かったものである。そこで、それらについて以下、若干解説してみようと思う。

本書で最も多く語られているのは「科学者の倫理性」の問題で、７回にわたって書いた。加えて、関連事項を「ナショナリズムと生命倫理」という別題で１回書いたから、計８回である。問題の焦点は、韓国のＥＳ細胞研究の“第一人者”と目されていたファン・ウー・ソク(黄禹錫)教授が『Science』誌に発表した論文をめぐる倫理違反とデータ捏造である。この問題が起こったのは、韓国が世界に先がけて生命倫理法を制定・実施した矢先だったから、なおさら注目された。最先端の科学研究では、成功した場合の名誉と経済的利益の大きさが研究者の判断を狂わすことがある。この事件は、それに加えて、先進国の仲間入りを目指す韓国のナショナリズムが大きく関与した。韓国国民の期待と尊敬の的だった最先端科学の研究者が、倫理規定や法に違反して、研究助手から卵子提供を受け、別の女性から卵子を買い、こうして入手した大量の卵子を使って、画

期的に効率よくＥＳ細胞を作成する技術を開発した、と世界的科学誌に発表した。しかし結局、発表データは虚偽であり、ＥＳ細胞は作成されなかったことが、後日の調査で明らかになったのである。

ＥＳ細胞を含めた先端医療技術の研究などでは、「科学技術のことは専門家に任せておけ」とか「医者や科学者を信じて任せてほしい」などと言う人が時々いるが、この事件を振り返ってみても、医者も科学者も“普通の人間”であることがよく分かる。従事している研究が、社会や人類の将来に大きな影響を与える可能性がある場合は、むしろ“人並み以上”の倫理性が求められ、それを満たさない人は社会的責任を追及されるのである。

本書で２番目に多く取り上げたのは「信仰と風刺」の問題である。これは、イスラーム最高の預言者であるモハンマドの風刺画がヨーロッパの新聞に掲載されたことを端緒に、世界各地でイスラーム教徒による暴動や製品ボイコットが起こり、フランス大統領や国連事務総長までが声明を出して“火消し”に努力したーーそういう事件を扱ったものである。私は、政治指導者の風刺画は大いに賛成である。しかし、世界宗教の“教祖”や“中心者”と見なされ、信仰の対象にさえなっているような人を風刺することには、あまり賛成できない。なぜなら、それによって多くの信者の心を傷つけるからである。が同時に、私は「表現の自由」を自由な社会に不可欠の価値として認めている。しかし、それを行使する際は、自由の行使によって生じる影響をよく考慮し、それでも行使しなければならない場合は、「他人を傷つければ自分も傷つけられる」ことを覚悟しなければならないだろう。

今回の風刺画の場合、暴動にまで発展した裏には、イスラーム社会でいろいろ政治的な動きがあったことが、後から明らかになっている。(同シリーズ３回目を参照)だから、この件は「宗教的対立」が原因であるよりは、「政治的対立に宗教的シンボルが利用された」というのが本当のところだろう。しかし、それが判明するまでには、メディアの迅速かつ大規模な報道によって、この事件は「宗教的対立が存在する証拠」として世界の多くの人々の心に浸み込んでしまっていた。嘆かわしいことと言わねばならない。

このほか“続き物”としては、「認知された“石油ピーク説”」や「政治が科学を抑えている？」問題、そして「実相の表現は簡単か？」という問題が納められている。“石

油ピーク説”とは、世界の石油の生産量は増加の後に“ピーク”を迎え、やがて減少するという説だ。この考えは、前作を書いた時点では世間一般には認められていなかったが、本書が扱う時期には、理由は定かでないが、一般の新聞や雑誌にも堂々と取り上げられるようになってきた。私はこの説を７～８年前から紹介しており、“石油ピーク”後には世界は石油の奪い合いの時代に入るのだから、紛争の防止、平和の増進のためにも、エネルギー源を化石燃料から再生可能の自然エネルギーに早く転換すべきことを訴えてきた。そういう視点がようやく一般に認められてきたことは、一応「喜ばしい」と言うべきだろう。しかし、先進国などでは、代替エネルギーとして「原子力」や「石炭」が取り上げられている点、この問題が本当に理解を得ているとはまだまだ言えない。

「政治が科学を抑えている？」では、アメリカのブッシュ政権下、政府機関が地球温暖化に関する科学的研究を自由に発表できないという問題を取り上げている。もっと具体的に言うと、ＮＡＳＡ(航空宇宙局)の筆頭気象学者が「温暖化の危機を訴える機会を奪われている」と内部告発した話を紹介し、政治が科学研究に介入する場合があることを実例で示している。大統領自身が「自由のために戦う」と宣言しているアメリカでこうなのだから、別の国でこれ以上のことが行われていても私は驚かない。ところで、この“反旗”を翻した気象学者だが、今年９月下旬のテレビニュースに登場して、「2050年までの温暖化はすでに既定の事実だから、今後の対策はそれ以降の温暖化をいかに遅らせるかに関わってくる」という意味のことを言っていた。この気象学者は、内部告発のおかげでやめさせられることなく、より自由な発言ができるようになったのだろう。そういうところは、アメリカの良さだ。

「実相の表現は簡単化？」という２回シリーズは、生長の家の教義に関するものだ。それも、最も基本的な「実相」と「現象」の区別のことと、人生を「実相を表現する過程」として見る人生観についてである。私が行っている生長の家講習会で出た参加者の質問に答える形で書いたが、十分な説明とは言えないながら、読者の参考にはなると思う。

次に“続き物”の形式はとっていないが、クリスマスに関連して３回書いたこと――「クリスマスは冬至祭？」「クリスマスはアメリカの伝統？」「季語・クリスマス」――に触れよう。長い話を短くまとめれば、「12 月 25 日にイエスの誕生を祝う」という習慣は、もともとのキリスト教にはなく、ローマ人の太陽神崇拝の祝日をキリスト教が“ハイジャック”したものであり、したがってアメリカ大陸に渡った清教徒たちは当初、

これを「キリスト教的でない」として拒否していたのだ。が現在では、クリスマスを祝わないものはクリスチャンでないと言わんばかり状況が、アメリカにはある。

一方、日本にあっては、商業主義も手伝って、エキゾティックな“愛の記念日”“親睦の日”として広く受け入れられ、俳句の季語にさえなっている。これらのことから分かるのは、宗教上の儀式や祭などは、それぞれの文化に都合いいように脚色され、一部受け入れられ、一部拒否されながら続いていくのであり、「不変の真理」「普遍の価値」と呼べるような宗教上の真理とは少し性質が異なる、ということである。教祖や開祖が始めたことは、どんなものでも、いつの時代にも、どんな場所でも墨守すべきだとする原理主義の考え方が、歴史的にも破綻していることがよく分かるのである。

最後に、この単行本シリーズやブログを応援して下さるすべての人々に対して、この場を借りて感謝します。そして、諸賢のさらなるご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

2006 年9月 27 日

谷口　雅宣　拝

Masanobu Taniguchi

電子署名者 : Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, c=JP - 日本, o=SNI International, email=masanobu.taniguchi@nifty.ne.jp
理由 : この文書の著者
日付 : 2006.11.01 16:04:42 +09'00'